

【佳作】

瞬く星のひとつ

重田雅（高知県 高知県立高知追手前高等学校 3年生）

入学当初は汽車の振動に胸を弾ませていたが、今では何とも思わない。移動するたびに移り変わる車窓の景色にも、もう慣れた。今日は運よく席に座ることができたけれど、特にすることは無い。明日も小テストがあるから、単語帳を広げてみた。でも、眺めるだけ。毎日同じことを繰り返していたら、飽きてくる。変わらない景色。変わらない日常。

別に、不満がある訳じゃない。建物ばかりでなく田んぼや川があるから、見ていて落ち着ける。それに高校生になってから、人間関係で悩むことはなくなった。優しい人たちに囲まれて、平和な学校生活を送っている。

でも、何の変哲もない中で淡々と日々を送っていたら、自分は何のためにここにいるんだろうって、考えてしまう。

自分には、何もないから。自宅の最寄り駅のアナウンスがかかった。単語帳を手提げ袋に入れて、代わりに定期券を取り出す。スマホは制服のポケットに突っこむ。車掌に定期券を見せるためにできた列に、私も並んだ。窓に自分の全身が映っていた。真っ黒な制服に身を包み、髪は無造作に一つにまとめられている。ぼんやりとした表情の自分と

目があった。

駅を出て、車道の端を歩き始めた。道路の脇には、いくつもの店が並んでいる。魚屋さん、パン屋さん、おもちゃ屋さん。けれど、どこもシャッターが下ろされている。

日はとうに沈んでしまっていて、辺りは静まり返っている。真っ暗な中、たまに通る車のヘッドライトと街灯を頼りに、帰路を急いだ。足元を見つめながら、足早に歩いていく。

自分には、何もない。最近そう感じるようになった。

勉強は得意じゃないし、運動だって、何でもこなせるわけじゃない。誰かに胸を張って自慢できることもない。リーダーシップがあるわけでもないし、ムードメーカーでもない。

何かに秀でていてるわけではないから、自分の存在がとても不確かなものを感じてしまう。ユーフォーキャッチャーの中で埋もれているぬいぐるみの気分。

溜め息が漏れた。同時に白い息が広がった。つんとした冷たさを鼻先で感じながら、歩を進める。一定のリズムで大股に歩いていく。自分の意思でこの足は動いているはずだが、そんな自覚はあまりない。新品だったローファーも、いつの間にか色が剥けてきた。

ふと顔を上げた。少し視界が開けて、街灯や家の明かりが目に入る。そしてその先には夜空が広がっている。

何となく、空を見上げてみた。自分でもなぜそうしたのか分からない。しかしその瞬間、うわあっと声が漏れた。そして思わず足が止まった。

星を流したような空。その一面に、無数の星が散らばっていた。

紅く煌いている星もあれば、白く冴えている星もある。ひとまわり大きな星に、砂粒のような星。数えきれない。どこを見渡しても、星は瞬いている。

ずっと足元ばかり見て歩いてきたから、気付かなかった。自分の頭上に、こんな景色が広がっていたことに。すうっと息を吸い込む。肺に冷涼な空気が行き渡り、より夜空が澄んで見えた。

大きさも違う。光の強さも違う。けれど、どの星も懸命に輝いている。この空いっぱい広がって、それぞれが瞬いている。私の悩みなんて、ちっぽけに思えるほどに。

自分には何もない。本当にそうだろうか。自分で気付いていないだけなのではないか。もしかしたら、まだ自分の奥底で眠っているものがあるのかもしれない。

もう一度、息を吸い込み、吐き出す。この空を、空気を感じたい一心で、呼吸する。

私もこの空に浮かぶ星たちのように、瞬いているのかな。かすかな光かもしれないけれど、あの星の中のひとつであるのかな。そうだといいのにな。

ふっと心が軽くなった。静かに瞬く星空と、しんと透き通る空気が心地いい。いつの間にか、自分の頬が緩んでいた。

私は再び歩き始めた。でも今度は、空を見上げながら、ゆつくりと歩く。私が車道の角を曲がっても、夜空は少しも変わらない。なぜだか安心感があった。

この夜空を目に焼き付けておきたい。マンションのエントランスに入るまで、私はずっと夜空を見上げながら帰った。